

船酔いして目が廻った。大人達も船酔いが多かった。船上での死者の方々の水葬は今も頭に残る。

聖なる日本佐世保に入港、上陸、身内の迎えも無く山陰方面行きの汽車へと乗りこんだ。

悲惨、満州の思い出

熊本県 奈須 竹子

主人は昭和十四年の春、熊本県庁の農業技手として勤務していましたが、大陸に憧れて満州国興農合作社職員に採用になって、昌図県の合作社に勤務しておりました。私は昭和十六年三月、縁あって結婚し満州に渡りましたが、その年の八月、四平街に転勤して、間もなく、チチハル野戦病院で三か月の衛生兵教育召集をうけて、十一月に帰宅しました。

私は、主人が教育召集をうけている時も、婦人会の呼び出しをうけて四平街駅で遺骨の出迎え見送りをしていた。列車の中に三段に作られた祭壇に白布に包ま

れた箱がぎつしり並べてあるのを拝見し、気の毒でならず、涙ながら白い菊の花を一本づつ差し上げていました。このことはノモンハンで亡くなられた軍人の尊い戦死とわかり驚きと悲しみを深くしました。

昭和十七年、撫順県公署に採用され、県農事試験所勤務となったので、場内に勤務していた満系職員とその家族と親しい交際ができました。

その頃、関東軍は南方に大移動などの噂を聞いていたが、昭和二十年三月に主人にも、撫順駅前に集合の召集令状がきました。朝五時、まだ薄暗いころ主人は霧の中へ去って行った後ろ姿は、とても悲しく忘れることはできません。覚悟はしておりましたものの、私は長男、次男と三人の生活が始まりました。

留守家族は励まし慰めあいながらも心細い毎日でした。国軍とか八路軍とか襲撃にくる等の話があつた頃でしたが、或日の夕方に空襲のサイレンが鳴り響き、驚きと緊張の中で柳行李に入れた次男を背負い、長男の手を引いて指定されてあつた防空壕に入りましたが、心細いこと限りありません。翌朝の連絡で又々、

空襲があると聞いて不安は増すばかりで、この時ほど他国の地であることが身に沁みたことはありません。

それから、三か月過ぎた八月十五日に落合さん家族と一緒に、今日は重大放送があるとの通知が廻ってきたので、ラジオの前に座りました。電波不調、雑音はげしいので聞きとれず、二人の話を申し合わせると、日本は戦争中止と言われた。決して負けたのではないと信じました。やっと敗戦とわかりましたと同時に主人達はどうなったのだろうかと不安がつるばかりで、只しつかりせねばならないと落合さんと手を握りあいました。その夜は二家族一緒に床につきました。翌朝、誰かがドアを叩くので出てみたら、主人が立っています。嗚呼、どうしたのですか。逃げてきたのですか。が私の一声でした。いやいや召集兵は皆解除されたのだ、鉄嶺にいたが大連にゆく列車の中で解除になったので撫順の近くで下車し夜は川原のテントで寝て夜明けから歩いてきた。

それから主人は、四日間ばかり寝込みました。百八十度の転換で、敗戦国の日本人となりました。

公舎に住んでいる人達で自警団をつくり、何事もこの自警団から通知をうけて生きてゆくことになりました。しかし敗けたものの自警団とあっても、ソ連兵に引っぱられて威嚇されながら日本人の住宅から盗った家財道具を運搬労働せねばならない。八路軍が私宅に五人で踏み込んで三か所の押入れを封印してしまつた。次にはソ連兵が二人で這入り、短刀を見せつけられた時は、私は命は無いと思ひ、だまって頭を下げていたが、何も言わずに持ち去つた。

私はそれから直ぐ髪を切り尼になつた。坂本さんと一緒に納豆作りを始めて、納豆売りに頑張つて露命をつないだ。北満から来られた軍属の親子と看護婦一人も同居させたりしたので大変な生活でしたが、幸い公舎をそのまま使用できたことはほんとに助かりました。

各日本人の学校の中には奥地から避難してきた方々がコンクリートの上に筵一枚敷いており、寒くなる、何も無い、どうすることもできない引揚げる日はわからない。栄養失調、病人老衰等々で毎日亡くなられる。

公舎に住む人々も同じこと、その度に主人等の自警団はお世話し、茶毘にする。私達は花一本供えてくるばかりでした。その哀れさ、戦争が終ったのに、平和になった筈なのに、この惨状、敗けても日本の国はあるのに、こんなソ連と八路軍の仕打ちに会わねばならんとは、憤怒やる方なかつた。

こんな生活の中に、かつて農事試験所にいた頃の王という満人が卵と米をもつてきて、県公署できいて、やっと見つけてきた。日本に帰るのか、と心から別れを惜しんでくれたのが忘れられません。

昭和二十一年七月二日、引揚者は撫順小学校の運動場に集合し、名前と所持品の点検が始まった、ところが検査する兵士の中に、公舎にきて押入れを封印した兵士が、私を覚えて笑顔で、帰るか、帰るのかと言って荷物を背負えと手伝って呉れました。平和であれば人間は皆同じだと思えました。緊張の気持がやわらいだ一瞬を覚えています。

奉天、錦州、コロ島に着き、大夕立ちにあい、皆ずぶぬれ、長男の手を引き、肩の紐を握りしめ、前を行

く人の足元を見て歩いた、長男も次男も、この親の心を感じたのか一声の愚痴も泣き声も出さず、びしょぬれになって乗船したのだった。

日本に帰れる、と思うと無性に涙が流れた感情でした。その当時夫三十六歳、妻の私は二十九歳、長男四歳、次男一歳であつた。

敗戦とわが子の死

熊本県 坂本 喜代子

三女の瑞代は腸の病気で、ハルピン赤十字に入院していたが、八月八日、二歳半の短い命を閉じてしまつた。

ソ連軍が、日ソ不可侵条約を破って、侵入してきた日である。

身辺にひしひしと不穏なものを感じながら慌しく茶毘に付し、当時佛壇とてないので、テーブルに骨箱を安置していたのだった。